トラック運転手の俺、山奥の教団で教祖のお清めを受けるたびに注がれ、迎えの車を見送って自分から脚を開いています

R18

2026・10・23

目次

第1話　告白の間

第2話　水垢離

第1話　告白の間

「門の前までです。帰りの車は、七日後の昼に同じ所へ来ます」

　運転手はハンドルから手を離さずに、前を向いたまま言った。

　送迎の車は、山奥の細い道をずっと低いギアで上がってきた。

　杉が窓を暗くして、対向は一台も来なかった。

　他人の運転する車の後ろの座席は、膝の置き場がない。

　俺はトラック運転手で、三か月前に夜の高速で中央分離帯にぶつけてから、ハンドルを握ると指が震える。

乗務を降りて休みをもらい、山奥の小さな教団の、三週間の籠りに申し込んだ。

車が止まり、俺は砂利に降りた。

門の内側で、年配の男が漬物石を両腕に抱えていた。

六十は過ぎている顔で、首に手ぬぐいを掛けている。

「荷物はそこへ置け。先にこれを樽へ戻してくる」

男は門の脇の樽に石を沈め、蓋を叩いて押さえてから戻ってきた。

「世話をしてる者だ。ここじゃ古株だから、分からんことは俺に聞け」

古株は盆を突き出した。

「携帯と財布と免許証。返せと言えば返す」

俺は携帯を盆に置いた。

ケースのひびが、上を向いた。

分離帯の夜に、運転席の床へ落ちてできたひびだ。

古株は何も聞かずに、その上へ財布と免許証を重ねた。

「俺の部屋の棚の箱に入れとく」

渡されたのは白衣が一枚だけで、下に着けるものは無かった。

陽が落ちてから、古株に廊下の奥へ連れていかれた。

障子が開くと、畳と行灯だけの部屋があった。

「告白の間だ。座って待ってろ」

古株が障子を閉め、草履の音が廊下を遠ざかった。

行灯の油が、ちりちりと焦げる音だけが残った。

正面の障子が開いて、痩せた男が入ってきた。

白い作務衣の袖が、手首の先まで余っている。

白髪まじりの髪を、後ろで一つに束ねていた。

俺の腕のほうが、この男の脚より太い。

男は俺の前に膝を揃えて座り、俺の顔ではなく、膝の上の拳を見た。

「芦刈です。この教団で、教祖をしています」

「……杣田だ。トラックに乗ってる」

「杣田さん。手を開いてください」

　開くと、掌に爪の跡が赤く並んでいた。

「車の中から、握り込んでいましたね」

　車にこの男は乗っていない。

　爪の跡を読まれたのだと、遅れて気づいた。

「眠れねえんだよ。だから来た。紙に書いただろ」

「紙に書く言い方は、ほかでも言ってきた言い方です。ここでは軽い」

「何がだよ。眠れねえのは本当だぞ」

　教祖は返事の代わりに、自分の膝の前の畳を指で示した。

「そこへ、脚を開いて座りなさい。運転するときの格好で」

「なんでだよ」

　教祖の指は、畳を示したまま動かない。

　俺は舌打ちをして、畳に尻を落とし、膝を左右へ開いた。

　座面の高さが無いので、膝が浮いて、腿の裏が張る。

　白衣の裾が膝のところで割れた。

　下に何も着けていないちんぽと金玉が、開いた腿のあいだへだらりと垂れた。

　隠そうとした手を、教祖の声が止めた。

「握ってください。手を、見せてもらいます」

俺は宙に両手を上げて、ハンドルの形に指を曲げた。

何も無いところを握ると、指の置き場が決まらない。

十年以上握ってきた太さだけが、掌の奥に残っている。

右の指先が、細かく揺れ始めた。

左も、遅れて揺れた。

宙で震えている指と、その下で裾から出ているちんぽが、同じ明かりの中にある。

男にそんな所をさらしたことは、一度もない。

教祖の目がどこにあるのか分からず、太い腿の内側に汗が浮いた。

「分離帯の、前の晩のことを」

喉が先に乾いた。

車の中で、ここまで言うまいと決めていたところだ。

「疲れてたんだよ。夜の便が続いてて、荷主が積み込みを遅らせやがるから、待ちの時間がそのまま仮眠の時間に食われてた。寝ろって言われたって、仮眠の棚は狭えし、隣の冷凍車はひと晩じゅうエンジン回してるし、寝られる所じゃねえんだ。だから、ちょっと入れただけだ。ちょっと入れたくらいでどうにかなる体じゃねえ。だれも怪我してねえし、会社も休めって言ってくれた。それでいいだろ」

言い終えてから、自分の口が何を零したのか分かった。

宙で握っていたはずの両手が、腿の上に落ちていた。

「ハンドルから、手が落ちましたね」

教祖は、俺の腿の上の手の甲に、指を一本置いた。

井戸の底の石みたいに冷たかった。

「入れた物の名前を、言いなさい」

「……酒だ」

音にしたとたん、喉の奥が焼けた。

棚で缶を傾けたときの、冷たい縁の味が奥歯に戻ってきた。

教祖の指が、手の甲から離れて、上へ向けて小さく動いた。

握り直せ、ということだと分かった。

俺は宙に手を戻した。

さっきより大きく揺れた。

「仮眠の棚だよ。カーテン引いて、頭ぶつけねえように首すくめて飲んだ」

聞かれる前に、口が先に出していた。

教祖は、震える右手の人差し指に、自分の人差し指の先を当てた。

当てたまま、何も問わない。

行灯の芯が、ぱち、と鳴った。

当てられた指の先から、震えが教祖の指へ伝わっていくのが見えた。

「事故のあと、まわりには疲れてたって言った。走ってる連中にも、所長にもだ」

「それも、軽い」

「……嘘だよ。疲れてたなんて嘘だ。それで通したんだ。だれも、なんにも聞いてこなかった」

　疑われなかったことのほうが、胃の底に重く残っている。

　三か月、それを抱えて天井を見て朝を待っていた。

　額から汗が一筋、鼻の脇へ落ちた。

「これで全部だ。だれにも話してねえことを、会ったばっかのあんたに全部吐いた」

「まだ、人に話せる形の分しか出ていません」

「もうねえよ。逆さに振っても何も落ちねえ」

「それは穢れです」

　短い一言が、胃の底へ落ちた。

三か月分の言い訳より重かった。

「体に溜まっています。話しただけでは出ていきません。今夜から、お清めをします」

「お清めって、何すんだよ」

「白衣を、脱ぎなさい」

俺は白衣の合わせを、片手で掴んで寄せた。

「営業所の更衣室だってカーテンあんだぞ。なんで初対面の男の前で、すっぽんぽんにならなきゃなんねえんだ」

教祖の指が、俺の襟にかかった。

細くて、冷たい。

振り払おうとして上げた腕が、途中で止まった。

この男は声を一つも荒げていない。

荒げていない相手を突き飛ばせば、悪いのは俺のほうになる。

白衣が肩から滑り、開いた膝の上に溜まった。

俺はそれを蹴りたかったが、蹴らずに脇へ押しやった。

腹の出っ張りが、行灯の明かりに出た。

運転席の窓を開けて走ってきた右腕だけが、肩の下まで黒く焼けている。

空気が脇の下と腿の裏を同時に撫でて、鳥肌が立った。

俺は腹を引っ込めた。

引っ込めても、肉は出っ張ったままだった。

「お腹の下に、まだ隠していますね。持ち上げなさい」

「……は？」

「両手で。下が見えるまで」

　俺は自分の腹の肉を、両手で下から抱えた。

　ずしりと重い。

　持ち上げると、腹の下に押し込まれていたちんぽと金玉が、むわっと汗の匂いをさせて出てきた。

　へその下には、ベルトの跡が一本、赤い溝になって残っている。

　毛の濃いところに汗が溜まって、行灯の火を照り返した。

自分の手で腹をめくって、見ず知らずの男に股を見せている。

顔に血がのぼった。

「十年敷いた座布団より汚えもん見て、楽しいかよ」

「離しなさい」

手を離すと、腹がどさりと落ちた。

落ちた肉が揺れて、金玉の上に被さり、また浮いて、揺れた。

「揺れが止むまで、動かないでください」

腹は、なかなか止まらない。

止めようと腹に力を入れると、かえって波打った。

教祖は脇の鉢を引き寄せ、揺れる腹から目を離さずに手ぬぐいを水へ沈めた。

揺れが止まったとき、俺の首筋は汗で濡れていた。

教祖が手ぬぐいを絞った。

雫が畳に落ちて、黒い点になった。

濡れた手ぬぐいが、首に当たった。

冷たさで、息が止まった。

無精髭の生えた顎の下を、冷たい面で押さえて拭われる。

窓の風で荒れた首筋を、人に拭かれたことは無い。

「首だけでいいだろ。あとは自分でやる」

「腕を上げなさい」

俺が肘を胴に貼りつけたままでいると、教祖の手が肘の下に入って、腕を持ち上げた。

骨ばった指の力は強くないのに、腕は耳の横まで上がった。

濡れた手ぬぐいが、脇の窪みへ入った。

冷たさで脇が縮み、毛のあいだから汗の匂いが立ちのぼって、自分の鼻まで届いた。

トラックの運転席で、この臭いを他人に嗅がせたことはない。

教祖は顔をしかめもせず、汚れた食器でも拭くように、脇の奥を往復させた。

日に焼けた右腕のざらつきを、冷たい面がゆっくり下りていく。

焼けた腕の肘の内側で、手ぬぐいが止まった。

「こちらの腕だけ、外の汚れを吸っています」

「窓開けて走ってりゃ、そうなるんだよ」

　腕を下ろされると、脇に残った水が肋のほうへ垂れた。

　手ぬぐいが、腹の出っ張りに触れた。

　さっき自分で持ち上げさせられた肉を、今度は他人の手が持ち上げて、下の溝を拭った。

　ベルトの跡を、冷たい布がなぞった。

　くすぐったさではない。

　見られたうえに拭われている場所が、熱を持ち始めていた。

「膝を、もっと開きなさい」

「これ以上やったら股が裂けるだろうが」

教祖の手が、俺の膝の内側に入って、外へ押した。

腿の付け根が引きつれるほど、脚が割れた。

日の当たらない内腿の肌は、自分でも見慣れないほど白い。

そこへ濡れた手ぬぐいが入った。

腿の筋が跳ねた。

冷たい布は、内腿の半ばまで上がって、付け根の手前で止まる。

また膝のほうへ下りて、また上がってくる。

付け根には来ない。

来ないのに、そこへ血が集まっていくのが分かった。

冷たいだけだと、自分に言い聞かせた。

それなのに、垂れていたちんぽが、腿のあいだで重たく持ち上がり始めた。

閉じようとした膝を、教祖の手が押さえた。

皮が剥けて、赤い先が行灯のほうを向いた。

さっき話した嘘より、こっちのほうが早くばれた。

「穢れが、出てきました」

教祖の声は、汚れた物を見つけたときの声だった。

喜んでも、驚いてもいない。

「ちげえよ。冷てえからだ。冷てえと縮むはずだろうが、どうなってんだ」

教祖は鉢から手ぬぐいを引き上げ、絞らずに広げて、勃った俺のちんぽに掛けた。

ずしりと冷たい布の重みが、先から根元までのしかかった。

「掛けておきます。落とさないでください」

「ふざけんな」

「落とせば、穢れが重くなったと見ます」

手ぬぐいの端から、水が金玉の上へ垂れていく。

冷たさで玉がきゅっと縮み上がり、それでもちんぽは布を持ち上げたまま下がらない。

布の重みで先が少し傾くと、俺は腹に力を入れて持ち直していた。

持ち直すたびに、ちんぽが布の下でびくりと跳ねる。

手ぬぐいの掛け竿にされている。

そう思ったら、また硬くなった。

教祖は鉢の縁に掛けてあった別の手ぬぐいを濡らし、俺の足を拭い始めた。

土踏まずを、冷たい布が強く押した。

アクセルを踏み続けてきた右の足の裏は、皮が厚い。

そこを丁寧に拭われると、くすぐったさが脛を駆けのぼって、腰が揺れた。

腰が揺れると、手ぬぐいがちんぽの上で傾いた。

「グ、ゥ……」

歯を食いしばって、腹で持ちこたえた。

汗が胸の谷を伝って、腹の出っ張りの上で止まった。

教祖は足の指のあいだまで拭い、それから手ぬぐいを鉢に戻した。

俺のちんぽに掛かった布は、落ちていなかった。

落とさなかったことが、落とすよりみっともなかった。

「私が出します」

教祖が、俺のちんぽから手ぬぐいを取った。

濡れて冷えた皮の上に、冷たい指が巻きついた。

細い。

それなのに、握られたまま腰を引いても抜けない。

「触んな、離せ」

指は離れず、ゆっくり根元から先へ扱き上げた。

「ン、ッ……ッ」

声を噛み殺したら、鼻の奥で詰まった。

冷たかった指は、扱かれているうちに俺の熱を吸って、ぬるくなっていった。

俺の汗で湿って、俺の体温になっていく他人の指が、いちばん恥ずかしかった。

速さは最初から変わらない。

遅くて、途切れない。

先から透明なのが滲んで、指の腹がそれを亀頭に塗り広げた。

ぬち、と小さな音がした。

畳の上で、音を立てているのは俺の股だけだった。

九十八キロの体が、六十キロそこそこの男の片手で、畳に縫いとめられている。

荷を担いできた腕は、畳の目を掴んだまま何の役にも立たない。

教祖のもう片方の手は、自分の膝の上に置かれたままだった。

片手で足りると、そう思われている。

「手が、畳に逃げています。握りなさい」

「この格好でかよ」

扱く手が、根元で止まった。

止まると、腰のほうが教祖の手を追いかけそうになって、俺は歯を噛んだ。

俺は畳から手を剥がし、また宙で見えないハンドルを握った。

脚を開いて座り、両手で何も無い輪を握り、その下でちんぽを他人の手に扱かれている。

毎晩、高速の入口でこの格好をしていた。

指が揺れた。

教祖の手が、また動き出した。

扱かれるたびに肘が跳ねて、見えないハンドルが右へ左へ切れた。

「先から、何が垂れていますか」

「……知るかよ」

　教祖の親指が、亀頭の割れ目を押さえて、そこで止まった。

　押さえられた所から、汁が親指の脇へ溢れ出した。

「言いなさい。杣田さんの言葉で」

「汁だよ。ちんぽの汁だ。男にいじられて、ちんぽから汁漏らしてんだよ、俺は」

　言わされたのに、声は思ったより大きく出た。

　だみ声が告白の間の天井に当たって、自分の耳へ戻ってきた。

　教祖は、溢れた汁を親指ですくい、俺の内腿の白いところへ塗りつけた。

ぬるりと冷たくなった跡が、行灯の火で光った。

「やめろ、きったねえ」

「拭くのは、最後です」

握った手が、また動き出した。

さっきより少しだけ強く、亀頭のくびれを指の輪がくぐるたびに、腰が畳から浮いた。

「フ、ッ……ゥ、フッ」

鼻から抜ける息を、俺は止められなかった。

あんな息の音を、トラックの寝台でも女の部屋でも立てたことはない。

行灯の油の匂いと、自分の汗と先走りの匂いが、鼻の奥で混ざった。

開いた膝が、指の輪が上がるたびに内へ寄り、下がるたびに外へ倒れた。

膝の上に置かれていた教祖のもう片方の手が、初めて動いた。

垂れた汁で濡れた金玉の袋を、下からすくうように掌に載せた。

冷たい掌の上で、玉が二つ、重さのままに転がった。

「重いですね。溜めてきた分です」

「量るんじゃねえよ、そんなもん」

掌が、袋ごと下へ軽く引いた。

付け根が伸びて、扱かれているちんぽの皮が根元へ突っ張った。

「ギ、ッ……ゥ」

上で扱かれ、下で引かれて、腰の置き場がなくなった。

「棚の中でも、手はこう震えていましたか」

缶を握っていた指が、宙で丸まった。

「うるせえ、黙っ……ッ、ク、ゥ」

黙れと言いきる前に、教祖の親指が裏の筋を押し上げた。

腿の裏が震えた。

金玉がせり上がって、腹の下に吸いつくように縮んだ。

頭の中には、夜の道ではなく、冷たい缶の縁が浮かんでいた。

酒の味と、嘘をついたときの所長の顔と、この冷たかった指が、ひとつに重なった。

気持ちよかった。

恥ずかしさのほうが大きいのに、腰は教祖の手の中へ自分から突き出ていた。

「声を、殺さないでください」

「声なら出てんだろうが。てめえの手が下手くそなんだよ」

教祖の手が、扱く速さを変えずに、握る力だけを強めた。

「グ、ッ……ギ、ッ」

食いしばった歯のあいだから、唸りが漏れた。

宙のハンドルを握っていた手が崩れ、俺は畳に拳を突いた。

「てめえの手ぇ、汚すぞ。いいのかよ、おい、どけって」

指は、どかなかった。

速さも変えなかった。

腹の奥が、きつく縮んだ。

「グ、ゥ……ッ、ッ、フ、ゥゥ……ッ」

出た。

白いのが、腹の出っ張りに飛んだ。

続けて噴いたのが胸のほうまで届き、残りが教祖の指を伝って金玉に垂れた。

腰が跳ねるたびに、教祖の指は最後まで搾るように根元から先へ動いた。

搾り切られてから、指が離れた。

俺は横ざまに崩れ、畳に頬をつけた。

畳の縁が冷たかった。

自分の吐く息が、腹の上の白いのに当たって、生臭い匂いを鼻へ返してきた。

教祖は汚れた指を、俺の内腿に塗った汁の跡の上で、ゆっくり拭った。

俺の腹のザーメンには、手ぬぐいを当てなかった。

拭くのは最後だと言ったその手ぬぐいは、鉢の縁に掛かったままだった。

膝を揃えて座ったまま、教祖はこちらを見下ろしていた。

慰めの言葉は、ひとつも無い。

その静けさの中で、瞼が重くなった。

三か月、どうやっても下りてこなかった瞼だった。

「このまま、眠ってください」

俺は逆らわなかった。

腹の上で乾いていくものの匂いを嗅ぎながら、目を閉じた。

今日会ったばかりの男に、だれにも言えなかったことを全部話した。裸のままだった。その男の手で出して、俺はその夜、眠った。三か月ぶりだった。

第2話　水垢離

　障子が、外から細く開いた。

「起きろ。暗いうちに滝だ」

　畳の端に、白い布が二枚置かれた。

　古株が、障子の隙間から顔を半分だけ入れていた。

　俺は三か月ぶりに落ちた眠りを、その声で切られた。

　体を起こすと、腹の出っ張りに乾いたものが張りついて、皮が引きつれた。

　昨夜、だれもそれを拭わなかった。

「なんだこれ」

「白衣と下帯だ。下帯は締められるか」

「……やったことねえよ」

古株は腕だけ入れて、下帯の端をつまみ上げた。

「前に当てて、後ろで締めて、余りを前へ戻す。緩けりゃ歩いてるうちに落ちる」

古株の腕には、濡れた手ぬぐいが何本も掛かっていた。

「俺はこれから洗い物を干す。滝は裏の道を下りた所だ。脇の小屋の干し竿は、今朝は俺が使うから、おまえの濡れたもんは岩にでも広げとけ」

草履の音が、裏口のほうへ遠ざかった。

俺は下帯を前に当て、後ろで締めた。

締め目が、腹に貼りついた乾いた跡の上にちょうど当たった。

白衣に袖を通し、廊下から土間へ下りると、土が足の裏に冷たかった。

裏の道は杉の根が浮いていて、裸足で踏むと根の硬さが土踏まずに食い込んだ。

下るほど、水の落ちる音が大きくなった。

木のあいだが白く開けて、崖から一本、太い水が落ちていた。

落ち口の手前に、平らな岩が張り出している。

その岩の上に、教祖が立っていた。

白い作務衣の袖が、水しぶきの風でかすかに揺れていた。

脇には、板で囲っただけの小屋があり、軒下に竹の干し竿が渡してある。

竿には、古株の干した手ぬぐいが、木の洗濯バサミで端から端まで留めてあった。

「杣田さん。落ち口へ入りなさい」

教祖は顔だけを、白く落ちる水へ向けた。

「あの下にかよ。頭割れるぞ」

「お清めの、水垢離です」

俺は岩の縁から、水の溜まりに足を入れた。

指の先から、骨まで凍った。

「冷てッ」

膝まで入ったところで、足が前へ出なくなった。

振り返ると、教祖は岩の上で両手を袖の中に入れていた。

袖の中の手は、出てこなかった。

俺は息を吸って、落ち口の下へ体を突っ込んだ。

水が頭のてっぺんを殴った。

首が肩にめり込むほどの重さで、息が胸の中で止まった。

白衣は一瞬で肌に貼りつき、出っ張った腹の形も、へその下のベルトの跡も、布越しに透けた。

下帯が水を吸って重くなり、ちんぽと金玉の形がそのまま浮き出た。

冷たさで、金玉が腹の奥へ逃げ込むように縮み上がった。

「フ、ッ、フーッ」

歯の根が合わない。

「流れの中で、穢れを口にしなさい」

　落ちてくる水の中で、口を開けると水が流れ込んできた。

　俺は水を吐き出して、怒鳴った。

「なんなんだよ、ここは。まだ外は真っ暗で、鳥だって寝てる時間だぞ。こんな水、トラックのラジエーターに入れたら凍って割れるわ。だいたい山奥にこもって滝に打たれりゃ眠れるようになるなんて、そんなうまい話があるかよ。紙には籠りとしか書いてなかったじゃねえか。白衣一枚と、締め方も知らねえ布切れ一本渡されて、夜明け前に崖の下で素っ裸同然で震えてんだぞ。それであんたは岩の上で乾いたまんまだ。いっぺん自分で入ってみろってんだ、くそったれ」

怒鳴っているあいだも、水は頭を殴り続けていた。

怒鳴り終えると、肺の中の空気が無くなっていた。

「水の文句は、いりません」

「……酒、飲んでたよ」

「それは、昨夜聞きました。同じ言い方では、水は受けません」

水が鼻に入って、俺は咳き込んだ。

「棚で、カーテン閉めて、缶開けて……仮眠の時間に、飲んでたんだよ」

最後のほうは、落ちてくる水で泡になった。

「上がりなさい」

落ち口から出ると、風が濡れた白衣の上から体を刺した。

岩の縁に手をついて、這い上がった。

膝が苔のぬめりに滑って、岩に打ちつけた。

岩に上がると、教祖が平らな面の奥を指で示した。

「白衣を脱いで、座りなさい。水のほうを向いて」

濡れた白衣は肌に貼りついて、腕から抜くのに手間取った。

剥がした白衣を岩の上に放ると、べちゃりと音がした。

下帯一本で、俺は落ち口のほうへ向いて膝を折り、踵の上に尻を落とした。

膝の下の苔が冷たく、ぬるりと膝の皿を滑った。

教祖が、俺の背後に回った。

背中に、乾いた作務衣の胸が当たった。

濡れた背中の水を、作務衣が吸っていくのが分かった。

細い腕が、俺の脇の下から前へ回り、胸の前で止まった。

「杣田さんの前には、私は触れません」

「頼んでねえよ、そんなもん」

「では、黙って座っていなさい」

教祖の指先が、右の乳首に触れた。

冷えて、豆粒みたいに縮んで尖っている。

骨ばった指が、それを挟んだ。

「ク、ゥ……ッ」

痛くはない。

痛くないのが、嫌だった。

冷え切った体の中で、挟まれている一点だけが熱を持った。

左には、まだ指が来ていない。

そっちは寒さで縮んだままで、挟まれている右だけが、指の中で硬くなっていく。

寒さのせいなら、両方とも同じになるはずだ。

そう分かって、喉の奥が鳴った。

教祖は右を挟んだまま、もう片方の手で左もつまんだ。

両方を、ゆっくり外へ引いた。

胸の肉ごと引っ張られて、前へ体が傾いた。

「引っ張んな、伸びるだろうが」

「では、戻るまで待ちます」

指が離れると、伸びた乳首が胸に戻って、じんと痺れた。

教祖が俺の左の脇へ回り、左腕を持ち上げて、その下から顔を入れてきた。

脇の毛の匂いが、自分の鼻にも届いた。

昨夜拭われたばかりの脇に、今朝は教祖の髪が触れている。

濡れた乳首を、唇が包んだ。

冷えきった皮膚に、口の中の熱が当たった。

「ハ、ッ……ァ、ハッ」

吸われると、乳首の奥から腹の底へ、細い糸を引かれたようになった。

舌が、尖りを押しつぶした。

離れると、押しつぶされた先がすぐに起き上がる。

起き上がった先を、また舌が押しつぶす。

口の当たっている所だけが熱くて、ほかは全部冷たい。

冷たいところと熱いところの境目が、乳首の根元にあった。

吸う力がわずかに強くなると、背中が反りそうになって、俺は苔に爪を立てた。

持ち上げられた左腕が、教祖の肩の上でだらりと下がっていた。

「腕を、下ろさないでください。脇が閉じます」

「重てえんだよ、この腕」

俺は肘を耳の横で突っ張り、自分の腕を自分で吊ったまま、乳首を吸わせた。

開いた脇から、毛の匂いがまた上がってきた。

口が乳首を離した。

唾に濡れた乳首が、風に当たって一気に冷えた。

「冷えたまま、立たせておきましょう」

教祖は小屋の軒下まで歩いて、干し竿から木の洗濯バサミを二つ外して戻ってきた。

古株の手ぬぐいが一本、留めを失って片側だけ垂れ下がった。

「おい、それ、何すんだ」

　答えの代わりに、教祖はまた俺の後ろに膝をついた。

　片腕を俺の胸の前に回し、その手で右の乳首を下からつまみ上げた。

　つまみ上げた根元を、洗濯バサミが噛んだ。

「ギ、ィッ」

　木のバネが、冷えて硬くなった乳首を潰した。

　痛みが胸から脳天へ走り、膝が苔の上で滑った。

　左も、同じように噛まれた。

「ン、ン、ンッ……」

両方の乳首から、木の洗濯バサミが一つずつぶら下がった。

息を吸うと胸がふくらんで、洗濯バサミが揺れる。

揺れると、噛まれた所が引っ張られて、また痛い。

息を止めると、苦しい。

俺は浅く、小刻みに息をするしかなかった。

「取れよ、これ」

教祖は取らなかった。

右の洗濯バサミの尻に、指を一本当てて、そのまま待っていた。

弾かれる、と分かった。

分かったまま、待たされている。

落ち口の水の音だけが、背中で続いた。

「……飲んでたって、言ってんだろ。寝台の棚で、ひと缶じゃねえ、袋ごと持ち込んで飲んでた」

ぱちん、と木が鳴った。

「グ、ァッ」

弾かれた洗濯バサミが乳首ごと跳ねて、熱い痛みが胸の奥へ刺さった。

痛いはずなのに、下帯の中でちんぽが重くなっていた。

教祖の指が、今度は左の洗濯バサミの尻に当たって、また待った。

「……疲れてたって、嘘ついた。所長の前で、わざと目ぇこすって見せた」

ぱちん。

弾かれるたびに、胸の筋が引きつれた。

洗濯バサミの重さが、乳首を下へ引いている。

下帯の前が、内側から押し上げられて、布が突っ張った。

濡れた布の中で、硬くなったちんぽの形が、くっきり浮いている。

「下帯を、どけなさい」

「あんたが脱がせろよ」

教祖の手は、洗濯バサミのそばから下りてこなかった。

俺は下帯の前に指をかけ、横へずらした。

締め方を覚えたばかりの布が、腰の脇でよじれた。

冷えで縮んでいた金玉が、腿のあいだにぶら下がって出てきた。

その上で、ちんぽだけが冷たい風に向かって反り返っていた。

「ご自分の手で、扱きなさい」

「……くそ」

俺はちんぽを握った。

昨夜の教祖の指より、ずっと太い自分の指だった。

握り慣れた太さのはずなのに、人に見られながら握ると、知らない物みたいに熱かった。

扱くと、先からもう透明なのが垂れて、指を濡らした。

「もう片方の手で、付け根を握って、下へ引きなさい。拭くときに、汚れが一番溜まっている所です」

俺は左手を下へ伸ばし、金玉の袋の付け根を、指の輪で掴んだ。

荷を締めるときは、締め具を引いてから、最後にもう一段、体重をかけて下へ引く。

俺の左手は、それと同じ手つきで付け根を引き絞った。

「グ、ッ……ッ、グ」

袋の皮が張りつめて、中の玉が二つ、指の輪の下へ押し出された。

張った皮が、薄明かりの中でつやつやと光った。

右手でちんぽを扱き、左手で金玉を締め上げる。

締めるほど、ちんぽが硬く反って、扱く手を押し返してきた。

「緩んでいます」

「これ以上やったら潰れちまうだろうが」

「平らになれば、拭きやすくなります」

言われて、左手に力をこめた。

玉が、皮の中で押しつぶされて逃げ場を探した。

腹の底から、濁った唸りが漏れた。

「ウ、ゥゥ……ッ」

そこへ、右の洗濯バサミが弾かれた。

ぱちん。

胸の痛みと、締め上げた金玉の痛みと、扱いているちんぽの熱さが、一度に腹の中で絡まった。

「『酒を飲んでた』と、言いなさい」

「酒を……飲んでた」

「それでは、昨夜より軽い」

締めた金玉の中で、玉が逃げようとして指を押した。

「酒、飲んでたんだよ、寝なきゃなんねえ時間に、わざと、飲んでたッ」

ぱちん、と左が鳴った。

「手を、見なさい」

俺は顎を引いて、自分の股を見下ろした。

空が白んできて、手の色が見えるようになっていた。

ちんぽを扱いている右手は、肩の下から指の先まで黒く焼けている。

金玉を締めている左手は、白い。

焼けた手と白い手が、俺の股に並んで、一本は竿を、一本は袋を握っている。

「黒いほうが、速いですね。白いほうは、まだ怠けています」

「……うるせえ」

教祖が、二つの洗濯バサミを指に引っかけて、上へ持ち上げた。

乳首が上へ引かれ、踵に落としていた尻が浮いて、俺は膝立ちになった。

「ン、ギッ、ィ」

腰が浮いた分、扱いていたちんぽが手の中から前へ突き出た。

太い腿の内側を、汗だか水だか分からないものが垂れていく。

洗濯バサミが下ろされると、俺の尻もまた踵の上へ落ちた。

上げられて、落ちる。

乳首を吊られたまま腰を上下させられて、そのたびにちんぽが手のひらの中を滑った。

自分で扱いているのか、扱かされているのか、もう区別がつかない。

教祖の手にあるのは、乳首から下がった二つの洗濯バサミだけだ。

風が吹いて、洗濯バサミが二つとも揺れた。

揺れに合わせて、俺の手が速くなった。

「ハ、ァッ、ハッ、ア……ッ」

落ち口の水の音が、遠くなった。

聞こえるのは、自分の手がちんぽを擦る、ぬちぬちという音だった。

濡れた手のひらが亀頭のくびれを通るたびに、腰が前へ突き出る。

突き出た先に、だれもいない。

白い水が落ちているだけだった。

教祖の指が、右の洗濯バサミの尻に当たって、また待った。

「……所長の顔、見られなかった。疲れてたって言ったとき、肩、叩かれたんだよ。よく休めって。それで、俺は、ああって」

ぱちん。

弾かれた右の乳首が、熱くて、もう痛いのか分からない。

金玉を締めた左手の下で、袋がぎゅうっと縮んで、付け根から上へせり上がろうとした。

締めた手の輪が、それを押し戻した。

押し戻されたぶん、ちんぽの根元に熱いものが溜まっていく。

「金玉、腹に入っちまう、くそ、上がってくる、これ」

「手は、止めません」

教祖の両手が、二つの洗濯バサミをいっぺんにつまんだ。

つまんで、まっすぐ前へ引いた。

木の口が乳首の先へ滑って、噛む所がどんどん細くなっていく。

「ア、アッ、待っ」

ぱちん、と二つ同時に外れた。

潰されていた乳首に血が戻って、焼けるように熱くなった。

「グ、ゥ……ゥッ、ン、ンンッ……！」

腹の奥がひっくり返った。

締めていた左手の中で金玉が跳ね、扱いていた右手の中でちんぽが跳ねた。

白いのが、落ち口のほうへ飛んで、手前の苔に落ちた。

噴くたびに腰が前へ跳ね、残りがずらした下帯の端に垂れて、濡れた布に溶けた。

扱く手は、出しきるまで止まらなかった。

出しきってから、左手が金玉を放した。

締められていた袋に血が戻って、そこもじんじんと熱かった。

膝が崩れ、俺は苔の上に両手をついた。

四つん這いになった俺の顔のすぐ前に、さっき出したザーメンが、苔の緑の上で白く光っていた。

息が乱れて、肩が上下した。

「苔の上のものを、手で水へ落としなさい」

「……指でかよ」

「岩に残せば、明日の朝もここにあります」

　俺は四つん這いのまま、苔の上の白いのに指を伸ばした。

　まだ温かくて、指にねっとり絡みついた。

　すくい上げると、糸を引いて苔から離れた。

　生臭い匂いが、顔のすぐ下から上がってきた。

　トラックの寝台で、ティッシュに包んで丸めて捨ててきたものを、今は素手ですくっている。

　俺は岩の縁へ這っていって、指を溜まりに突っ込んだ。

冷たい水の中で、白いのが指からほどけて、糸みたいに流れていった。

苔にはまだ、すくいきれなかった分が光っていた。

もう一度戻って、手のひらで苔をこすった。

こすった手のひらを、また水に浸けた。

四つん這いで岩の上を行ったり来たりするたびに、ずらした下帯の脇で金玉が揺れ、腿の内側にぺたぺた当たった。

そのあいだに教祖は、外した洗濯バサミを二つ、干し竿へ戻していた。

垂れていた古株の手ぬぐいが、元どおりに留められた。

作務衣の胸には、俺の背中の水を吸った跡が、濃く残っていた。

「日が上がる前に、もう一度浴びてきなさい」

「……今かよ」

「出したものは、流れに置いていくのです」

俺は苔に手をついたまま、しばらく動けなかった。

胸を見下ろすと、両方の乳首が赤く腫れて、洗濯バサミの噛んだ跡が一本ずつ白く残っていた。

それを見ていたら、下帯の陰で、出したばかりのちんぽがまたひくりと動いた。

俺は下帯をずらしたまま立ち上がり、岩の縁から溜まりへ下りた。

出したばかりで火照った腿に、水が刃物みたいに当たった。

「ヒッ、ィ」

腰まで浸かると、垂れていたちんぽと金玉が、冷たさで一気に縮んで腹へ逃げた。

俺は落ち口の下へ戻った。

水が、腫れた乳首を真上から叩いた。

「ア、ッ、グ、ッ、ァ」

洗濯バサミで潰されていた所に、落ちてくる水の粒が一つずつ刺さる。

両腕で胸を庇った。

「腕を、下ろしなさい」

小屋の前から声が来た。

「乳首が千切れんだよ、これ」

「胸は、ついています。下ろしなさい」

俺は腕を体の脇へ下ろし、拳を握った。

水は胸の真ん中で割れて、腫れた乳首の両方を、休みなく打った。

痛みで肩が跳ね、跳ねるたびに水の当たる所がずれて、また別の痛みが来た。

縮んでいたはずのちんぽが、水の中で、また重くなっていった。

冷たい水に打たれながら、半分持ち上がって揺れている。

握っていた拳がほどけて、手が下へ伸びかけた。

「その手は、もう要りません」

伸びかけた手は、太腿の横で止まった。

止めたのは俺の手だ。

落ち口の水を頭から浴びて、乳首を叩かれて、勃ちかけたちんぽを揺らしたまま、俺は拳をもう一度握り直した。

教祖は小屋の前で、濡れた胸の跡を乾かしもせずに、その拳のほうへ顔を向けていた。

「……嘘ついてたんだよ、ずっと」

だれにも聞かれていないのに、口から出た。

水の音で、自分の耳にも半分しか届かなかった。

「朝餉に、遅れないように」

教祖はそれだけ言って背を向け、杉の道を上がっていった。

小屋の干し竿で、古株の手ぬぐいが風に揺れていた。

罪の言葉と一緒に出すことを、体が覚え始めた。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名　トラック運転手の俺、山奥の教団で教祖のお清めを受けるたびに注がれ、迎えの車を見送って自分から脚を開いています

サークル　タビューへ

発行日　2026・10・23

レーティング　R18